

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

現代ロシア語の学校文法における機能モデルへの視座

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2000-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 光昭, Murakami, Mitsuaki メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1444

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



現代ロシア語の学校文法における 機能モデルへの視座

村 上 光 昭

テキスト研究 発話連続における情報の流れ—テーマ・レーマー文へ
戻る

ロシア語研究 文研究一文のタイポロジー—始発単位

これら二つの経路を往還的に作用させて機能モデルを造り上げる試み。

ロシア語を学ぶ上で直接手にできる資料は書き手によって完成されたテキストである。これをもとに我々が研究できるのであり、これをどの観点から、総合されたテキストとしての情報を、線条的に連続して、理解するかメカニズムをまず明らかにしたい。ロシア語の非母語話者として日本語を母語とする話者が、ロシア語を機能的に用いるうえで多少でも明確なモデルを提示することが、ロシア語研究の基本にあると考えている。これは概観的にこの姿を示して見ようとする試みである。

学問的研究という言葉資料を超えた、鳥瞰するような、位相での理解を基にある種の論を展開するあるいは埋もれた姿を明らかにすることがある、また、当然、他にも様々な学的研究があろう。しかし忘れられてはならないのは、理解のために文法を研究して、あるレベルの対象を分析記述してあるモデルを提示することが基盤にある。しかし我々が目指すのは深い理解を基にした、理解からでる、働きかけのモデルを示すことである¹。この課題を

1 Мельчукの「意味—テキスト」モデルにおける言語の定義参照。「言語とは意味とテキストの一定の対応、プラスこの対応を具体的な手順で「実現する」ある種のメカニズムである。つまり意味からテキストへ、および逆の移行をするのである」。И.А. Мельчук Опыт теории

実現するには、ほとんど絶望的と言っていいほど困難な問題に直面する。現段階で音声認識と機械翻訳がどのレベルにあるか定かではないが、われわれは、学校文法の上に構築されるべき、機能文法を造り上げようとする、意志であり、願いである。²

我々がロシア語あるいは非母語と関わりがある場合には異種言語間の理解の装置として翻訳機が脳髄に存在しているのであろう。³しかしそれらの分野

「лингвистических моделей (смысл <=> текст) М. 1999 стр. 9「この意味とテキストの対応を(意味からテキストおよび逆への移行手順を確保するメカニズムとともに)、言語モデルとみなし、つまり担い手の脳内にコード化された、「意味<=>テキスト」のある種の改編するものとして示すことを提案する」там же стр.12. この書は既に1974年に出版済みだが、1999年に「序文(1998年)」や付録を付して出版された。

また、「言語の意味とテキストはその担い手によって直接把握される。しかしそれらを結合する規則に関してはことは全くそうではない。我々は古典的な状況の「暗箱」のなかに言語学者としてのであり、観察できるのは、当該言語の「入り口」=意味と「出口」=テキストだけである。言語に関心を寄せる研究者にとって唯一知恵ある解決法は形式規則体系を構築することである。そしてこの体系のモデル化はできる限り正確な上の観察できる対応である。結果として得られるのが自然言語の機能モデルである。我々の場合にはこれは意味テキストモデル(МСТ)である」。И.А. Мельчук Курс общей морфологии Т.1 стр.45

2 ロシアにおける機能文法の流派は多数ある。広く考えればすべての文法はある面で機能的である。Проблемы функциональной грамматики, М. 1985参照。その主たる代表者であるБондарко, А.В. は言語単位を異なるレベルから一纏めにして機能意味場を取り出し、他方一般的意味からきわめて抽象的な範疇状況を構成しこれらの組み合わせによって、機能文法を聞き手の文法と話し手の文法を総合しようとする。他方、Золотова, Г.А. は一貫して機能文法を展開し、言語の基本単位を統語辞書 Синтаксический словарь, М. 1988という姿で完成し、文のタイポロジイを提示、連続的に結合組み合わせから機能的に文を構成できるとするモデルである。現在では主たる観点は機能文法中の言語を操る人間、すなわち話者に重点を置いて、テキスト文法的な方向へ進み、ここで機能文法の主体である話者に関わる言語現象を一貫して研究している。

Бондаркоはその機能文法の基本的骨子となった Функциональная грамматика, М. 1984での結語で次のように述べている。この機能文法を応用する人、すなわち所与言語の担い手も、所与言語を能動的に習得を願う人にもことばにおいて、発話において伝える意味、その種類やヴァリエーションの体系を形式手段体系と関係づけて手にいることができる。このような機能文法は未だ作成されていないし、今後作成しなければならないとも述べている。その流派では一連の機能文法の理論によって、ロシア語を範疇状況を基本に、機能意味場の記述がその理論と共に完成している。他方、Золотоваは Коммуникативная грамматика русского языка, М. 1998ロシア語の伝達文法を完成している。学校での非母語話者にとっては、明らかに、ゾロトヴァのアプローチの方が利用しやすいのは、文法の意味を構成する始発の基本単位が明確であり、その組み合わせによって、ことばへいたるすべての文が順序づけられて、成立するからである。他方、Бондаркоには、基本的なアスペクトを解明する必要性が、より広いコンテキストへ目が向き、統語意味論の方向から機能文法へ至ったと考えられる。

3 ヤーコブソンは翻訳について三つ挙げている。1) 言語内翻訳、すなわち言い替え rewording は、言語記号の同じ言語の他の記号による解釈である。2) 言語間翻訳、すなわち本来の翻訳 translation proper は、言語記号の他言語による解釈。3) 記号間翻訳 intersemiotic translation、すなわち、写し換え transmutation は、言語記号の非言語記号体系の記号による解釈。Selected writing II 261。これはБондаркоによって「差異があるのに等価である」ヤーコブソンの概念と意味の階層化の現代の論点、Роман Якобсон Тексты, документы, исследования, М. 1999所収で、意味の階層化の研究に上記1) は同義列の研究

へわたる専門的な領域を云々することは不可能である。あくまでも弁証におけるモデルの提示であるが、われわれが非母語と対峙するときには、かならず母語への参照解釈を通じて理解する、つまり対象言語の意味理解に際しては、必ず母語の意味の中で理解し、働きかけているのだろう。そこで母語を参照せず、情報の理解あるいは働きかけができる人にとっては、複数の言語が母語として、それぞれの文法と辞書が脳髄中に確立しているであろう。非母語のロシア語を学ぶものも研究するものもそのような望ましい姿はただただ望むべくもないのである。それゆえわれわれは母語としての日本語とロシア語を、学習、研究中につねに自己内の翻訳装置に依拠しているわけである。ここに翻訳という意味を異なる構造に変換するという対応を常に行っているわけである。つまり不断に対照と対応付けに迫られているわけである。

このように最終目標として理解のための文法を働きかけのための文法へと造り上げねば、われわれは、理解を深めることはできても、必要な情報を相手に伝えることはできない。これまでの規範文法や学校文法は言語の正しい姿を提示するわけであり、これがあれば個人の力で正しく情報伝達ができるのであると理解されているようである。つまり我々は常に原典なるロシア語のテキストがあるから、理解を深め、克明な分析から、あるモデルを提示する、あるいはロシア語を記述するという意味があるのだという考えである。これはまさに昆虫の標本を云々するのと同じ態度であって、昆虫の飛行の仕方を学ぶものではない。我々がロシア語に携わるのは学ぶ人にその飛行の仕方を望ましい姿で教えることであり、そのためにロシア語を研究するのであるといっても過言ではあるまい。

では一体どうすればよいのか。困惑するが、我々はあくまでも母語の言語

ゝ究、2) は通常の翻訳との対照が必要である。さらに、3) は記号法間翻訳 межъсемиотический перевод として話者の意味のコード化体から思考・ことばの口述化への翻訳と聴者の活動としての口述コード化体から意味への翻訳と捉えている。

ここから我々がロシア語を研究し教育する場においては、この多重の翻訳が絡み合っており、まさに、機能的なアプローチが言語研究教育には不可欠で、「実用的」などと規定して、学問的研究を重視し克明な分析記述を行いモデル化するときにはきわめて静的なモデルであり、情報を造り上げるという総合化としての動的モデルにはならない。

感覚と意味世界からある種抽象的な思考を引き出しそれが普遍的であろうと考えておくことにする。つまり、ある言語からある言語へは必ず翻訳が可能であると言うことである。ここから外国語としてのロシア語にアプローチするのである。最も重要であるはずの音声はここでは直接扱わず、⁴書かれたテキストについて論を進めていかざるをえない。

働きかけの文法をうんぬんでできるのは、テキストを書き上げた話者の全ての意図が実現されたものとして、観察する必要がある。この言語を機能的に用いるという、すこぶる日常的な「実用」レベルにおいては、言語に備わった全ての本質を駆使することである。従って音声は不可欠であり、また形態法の知識、統語法、造語法など、言語学記述の厳格なレベルの素材を混在させて、ことばとなるという、ごく普通のことが十分理解されねばならない。⁵

テキストは「ことばのある纏まり」として、書き手としての話者が意図を持って纏めたという明確な認識も必要である。テキストを観察するとき一部始終が話者の認識を経た情報である。このレベルはまさに小さな基本単位から組み合わされ、結合された文の連続によることば化された資料である。このことば化されたテキストは、その基底部に言語としてもモデルである様々な文タイプその他のメカニズムで組み立てられているのである。われわれはたんにことばの活動では常に発話を簡単に形成するのに、その内実を弁証するには、多大の労力を要するのである。

4 最終的には言語とは分節音の流れであるから、意味が音表示となるその対応が言語である。音を欠いた音楽はないが、音を欠いた言語は異なる記号体系と考えられる。学校文法での音およびイントネーションの修得は言語が機能する上では不可欠であるが、音に関わる学的研究の成果の反映はきわめて一般的なものに留まる。

5 言語記述研究では厳密なレベルを区別して、それぞれの単位を記述して、それらを下から上へと向かうことでより大きな単位となり、伝達単位としての文が形成されるというのが学校文法やアカデミア文法である。しかしボンダルコの機能文法に見るように異なるレベルの単位を機能意味場として纏めるレベル横断的な考えがある。またゾロトヴァの「統語辞書」は長年の機能文法の立場での意味基本単位を辞書化したものであり、その文のタイポロジーによって、非母語話者のロシア語学習での、伝達単位としての文を形成はできる。ここではその部分には重点を置かず、書き手の意図を実現した纏まったテキスト理解から、そのテキスト構成法を取り出し、それを機能的に読者聴者が用いることを目論見としている。

ここでロシア語に対する非母語話者には、テキストを観察する場では、全体の中では話者の意図としての情報伝達の手順である。言語の線条性と言語話者の記憶の限界から、発話構造に制限をかける装置が現れているのである。これは既に書き手としての意図の全体像が示された結果である作品としてのテキストをゆったりと辞書を参照しながら、ことの正否は別にして、任意の部分からアプローチできる。しかし重要なのはテーマ・レーマの構造が明確に示されているから、情報の流れとして整然と理解へと至るのであろう。この言語の本質である線条性とテーマ・レーマ構造および情報伝達の有情・情動表現をテキストの全体の中で明確な認識を持って理解に至る。まず注記しておく、翻訳本が難解で読みにくいのは、おそらく、この基本的な特徴を捉え損なっている⁶。しかしここで一点着目すべきは、書き手としての話者の語りの進展が、他の言語に転換されて、初めて問題が明らかになることである。翻訳という作業が個人的なものであるはずなのに、社会的にそれが受け入れられるからである。おうおうにして文法的特徴を規範に従って解説してしまうことが多く見られる。しかしもっとも単純な例としてテキスト、発話の線条性とテーマレーマおよび従属の深度が相関して話の流れを規定している。単文の例では (Вот рисует Петя.) Он рисует очень хорошо の類である。これは明らかに上手に絵を描くというのではなく、彼の描き方は上手だということである。つまり文法的に副詞句が明確に添加によって動詞に従属しているのであっても、従属している項目が意味的にも情報として重要なのである。これはテーマ・レーマ構造における中立文における文末での論理アクセントがあるということに関連している。あるいはまた承前詞＝関係代

6 確かに翻訳で何が正しく何が誤りであると断言するにはなじまない。与えられた翻訳のいずれが誤りではないとは言いうる。さらに翻訳が何のために存在するのかという問いにも関わりがあり、翻訳と原典と見比べる人が正誤を評価するのはきわめてマージナルな領域に入り、この本質を見極めるには様々な材料が必要である。これは2の同義列が原典側にあるのであり、翻訳列は個別に原典と対応しているからである。結局は訳者の最大限の理解がその翻訳に示されているに過ぎない。このあたりに問題があるとすれば、一字一句漏らさず聴くとか、読むという次元で、母語での抽象能力の発揮できる領域と、非母語でのその能力が不全であることに起因するのであろう。

名詞による従属文を持つ複雑文である。Его кожа имела какую-то женскую нежность; белокурые волосы, выющиеся от природы, так живописно обрисовывали его бледный, благородный лоб, на котором, только по долгом наблюдении, можно было заметить следы морщин, пересекавших одна другую и, вероятно, обозначавшихся гораздо явственнее в минуты гнева или душевного беспокойства。(Лермонтов)彼の肌は何か女の優しさがあった。金髪は生まれながらの縮れ毛で、くっきりと、青白い形の良い額に波打っていた、そして額には、長く観察してからのことだったが、しわの跡が何本にも気がついた。これらは互いに交じりあっていたり、きつと、はるかにくっきりと見えるのは、怒ったときや心おだやかならずの時であろう(拙訳)。この文では彼の金髪の記述をしたうえで、ある点に着目した話者が額のしわを指摘して、それが怒りや不安なときにはもっとくっきりするだろうと自分の観察推測を述べているのである。つまり、情報構造となるためには、文モデルによって構造化された一つの陳述が、他の陳述と結合できるように、組み合わせられて、展開していく様は、まさに書き手としての話者が意図したとおりである。その書き手の手法のなかに、われわれが引き出さねばならないのは、明快な話の展開である。この文では単に承前詞＝関係代名詞による従属文だけでなく、形動詞表現や、挿入句表現が陳述の形を変えて、一つの複雑文に取り込まれ納まっているのである。この例でいまの時点で喚起しておきたいのは、言語表現の線条性であり、それに従った語順、承前詞による前方展開としての新情報、従属文に見える筆者としての話者の視点、個別陳述の末尾の情報の重要度と、文全体の最後のレーマに相当する、従属形動詞のさらに深く従属する副詞句である。こうしてみると、抽象的な場での情報伝達の線条性は日本語にあっては縦書きで典型的に示される構造での情報の流れと、横書きのロシア語ではさほど差異は見られない。つまり線条性を強く意識して、あるいは記憶力の及ぶ範囲での、テーマレーマ構造を理解することが重要である。もう一例チャーホフの退屈な話より：

—Ты делаешь вид, что ничего не замечаешь, но это нехорошо. Нельзя быть беспечным.... Гнеккер имеет насчет Лизы намерения... Что ты скажешь?

—Что он дурной человек, я не могу сказать, так как не знаю его, но что он мне не нравится, об это я говорил тебе уже тысячу раз.

質問に答える老教授は明らかに伝達的に有標の表現をしている。思考動詞は通常は思考内容を表現する補文を後に取るのが、中立語順である。ここではそのような事柄を自身言えないよ、また次の文でもそんなこと何度も言っているだろうと述べる部分が論理アクセントを帯びている、つまり焦点化・レマ化されているのである。このように観察すると、日本語であれロシア語であれ話者の切り出す発話内の項目の順序が重要であることが良く分かる。まさにこれが、言語の線条性の持つ意味である。さらに語順と文構造に関しては以下に述べることになる。

それでは全体のテキストから観察できる点は何であろうか。それは書き手である話者が発話構造内に見えかくれすることである。一般に話者は視覚、聴覚などの感覚を用いて、直接的表現をする。これは言語学における私、いま、ここという話者の絶対的自己中心性である。したがって全ての発言に話者は責任を持つが如くの構造を成す。上のルールモントフの例でлюб, на котором, только по долгом наблюдении, можно было заметить の部分は明瞭に話者が隠れていると判断できる。第一の только по долгом наблюдении では動詞の名詞化による観察から観察者は誰であるのかは自動的に判断でき、なおかつその観察も相当の時間をかけているということは、話者の観察の態度まで見て取れるわけである。並々ならぬ関心を主人公に寄せているわけである。次に можно было заметить では明瞭な空の位置に話者が隠れているのである。

この時点で我々は話者がいかなる意図である種の伝達内容を発話として供するのに文モデルを用いるのかを見ていかなければならない。言語内の文モデル

や、単位を見る前に全体のテキストから判断できる、発話文と情報の対応および話者の意図との対応を見るのである。そこで一つのフラグメントを挙げて、テキストの構成、発話モデルを観察することにする。例として「現代の英雄」の「マクシム・マクシーミッチ」に述べられているペチョーリンの姿を記す部分を挙げる。全体を抜粋したいが紙幅もありテキスト部を原文との対照的に検討を加えてみたい。

Навстречу Печорина вышел его лакей и доложил, что сейчас станут закладывать, подал ему ящик с сигарами и, получив несколько приказаний, отправился хлопотать. Его господин, закурив сигару, зевнул раза два и сел на скамью по другую сторону ворот.

この部分是对極的な位置にある書き手がペチョーリンの出現を動作として再現している。いずれも完了体動詞過去形（副動詞を含む）で、順次動作を示している。一つの完了体動詞の過去形がアオリストとしての動作をし終えた。従って、連続して、ここでは、主人公と従僕との動作が個別に、進展的に示されている。ただ一つ、従僕が報告した内容に、完了体未来形が生じたのは、報告時点後に、馬を繋ぐという事態があるからである。

主人公の姿の具体的な描写は、多くは書き手の主人公についての考え方として述べられている。

Он был среднего роста; стройный, тонкий стан его и широкие плечи доказывали крепкое сложение, способное переносить все трудности кочевой жизни и перемены климатов, не побежденное ни развратом столичной жизни, ни бурями душевными, пыльный бархатный сюртучок его, застегнутый только на две нижние пуговицы, позволял разглядеть ослепительно чистое белье, изобличавшее привычки порядочного человека; его запачканные перчатки казались нарочно сшитыми по его маленькой аристократической руке,

この部分は主人公の特徴付けとして下線部の⁷、彼は中背である、が唯一の独立した文である。その他の彼の記述は名詞化されて、文の成分を占めている。しかしそれらはいずれも書き手が自身の立場から価値判断をしている。まず、彼はスマートな体つきで肩幅が広い。これは書き手の側からは次の証明である：これは強い林である、なぜなら流浪生活のどんな困難にも、気候の変化にも耐えうるし、首都の放埒な暮らしにも、逆巻くような心にも負けないのだと。

埃をかぶったピロードのフロックコートは、下から二つの釦だけがかけてある、とこの部分は、主人公の姿の描写である。しかし、このために書き手が目にすることができたのが、眩いぐらいの白いシャツであった。これも主人公の記述であるが、このシャツから書き手が連想したのは、かなりの身分の人の習性である。主人公の手袋は汚れきっているが、手はとても小さい。そこで書き手は手袋は特別製であり、まさに貴族の手に合わせたものに見える」と述べているのである。

つまりここに見えるのは、テキストはいくつかの文から全体的な伝達する情報的意味を編み上げているが、一つ一つの文内にさまざまな意味的レヴェルの語彙が、客観的に観察可能な意味から、対象から連想され論理的帰結として提示される意味が文においても、文の成分においても現れている。すべては書き手の観察からくる、人物の記述であり、対象の記述であり、自らの観察から来る論理的価値判断、物事の一般化が現れている。したがって、単一文内における動詞や、形容詞、挿入句、助辞などを克明にたどると、客観的な記述と、主観的な記述が明確に見えてくる。

Теперь я должен нарисовать вам его портрет.

7 以下のテキストでの下線、イタリックは筆者のもの。下線部はあるところでは動作の再現、あるいは対象の記述、イタリックは書き手の考えあるいは述語あるいはレーマ相当である。この部分はゾーロトヴァの方法（Г.А. Золотва Коммуникативная грамматика русского языка, М. 1998参照）を実践する試みであるが、いまだ全く不十分である。今後の問題は彼女のいう伝達レジスターと文モデルの対応や、アスペクトの関連を明らかにする必要がある。また文成分内の、とくに名詞句内に生起する形容詞に単純な記述となる述語と、話者・書き手の評価としての述語を区別する必要がある。

筆者が読者に肖像を描くことを義務と感じている。

и когда он снял одну перчатку, то я был удивлен худобой его бледных пальцев.

彼が片手の手袋を脱ぐ完了体過去のアオリストとしての動作をしたことから、色白の片手が現に見えており、そこに筆者が目に向けて視覚に入ってきた事柄は、驚きであり、青白い指が痩せ細っていたことだった。ここでは複文内には陳述が結合されており、論理的に説明しうることになる。つまり簡単に因果関係として捉えることができるのである。逆に言えば、手袋を脱がなかったら、驚く事態は生じなかった。それゆえ、手袋を脱ぐ→白い手が見える→驚いた（何故）→指が痩せ細っている。

Его походка была небрежна и ленива, но я заметил, что он не размахивал руками—верный признак некоторой скрытности характера. Впрочем, это мои собственные замечания, основанные на моих же наблюдениях, и я вовсе не хочу вас заставить верить в них слепо.

主人公の歩き方がぞんざいで気怠いというのは、まさにこの特徴付けは書き手の判断である。しかし主人公が両手を振り回さないことに気づいた書き手が、このことから、自身の論理的帰結として、ある種、性格を隠しているのだと確信するのである。но заметил, что....—верный признак.... しかしここから先は、書き手個人の観察から言うことであって、読み手に向かって、それを盲信してほしくないと要請している。

Когда он опустил на скамью, то прямой стан его согнулся, как будто у него в спине не было ни одной косточки;

時の限定に現れたのは、客観的な主人公の動作である。そして完了体過去のアオリストで表現されている。この時、客観的に見える主人公の動作はやはり完了体過去のアオリストである。ぴんと延びた彼の軀がかがみ込むと、さながら彼の背には一本も骨がないかのようにであった。動作の再現と、それ

から連想する、比較。しかし、動作再現部は内部でテーマ・レーマと分割されて提示された後は、それ全体が旧情報としてのテーマとなり、比較表現がこの情報の有意味なレーマとなっている。

положение всего его тела изобразило какую-то нервическую слабость; он сидел, как сидит бальзакова тридцатилетняя кокетка на своих пуховых креслах после утомительного бала.

彼の体のありようが、書き手にとっては、神経的に弱そうだと目に映り、座っているのを見ては、さらがバルザックの三十過ぎのコケットを連想させるというふうに、ある状況での人物のありようが、書き手には様々な連想が生じ、この部分が読み手に書き手の意図するところへと導くのである。最初の文では主語に相当する положение всего его тела が補語の какую-то нервическую слабость という名詞化の基「弱さはなにか神経質からくる様だ」слабость как-то нервическая を導き出すのが、書き手自らが描いて見せた動詞 изобразило である。しかしもはやここには実質的な描くという動作ではなく、書き手の観念としての連辞化である。彼の姿勢はなにか神経症的に弱いのだと書き手が間接的に断言しているのである。

С первого взгляда на лицо его я бы не дал ему более двадцати трех лет, хотя после я готов был дать ему тридцать. В его улыбке было что-то детское.

書き手のことばそのもので、第一印象からの、年齢の推察と、様々な観察後の自分の推測の修正。その枠組みは С первого взгляда на лицо его...., хотя после.... である。その最初の推察ではやはり確信が欠如するという点から、陳述緩和のための助辞 бы が添えられている。

Его кожа имела какую-то женскую нежность; белокурые волосы, вьющиеся от природы, так живописно обрисовывали его бледный, благородный лоб, на котором, только по долгом наблюдении, можно было заметить следы морщин, пересекавших одна другую и,

вероятно, обозначавшихся гораздо явственнее в минуты гнева или душевного беспокойства.

彼の肌に対する書き手の判断は、なにか女のような優しさがある。金髪は、生まれながら縮れ毛だ。その毛が、書き手の目にはまるで絵のように、額をくっきりと見せていた。しかし、やはり、書き手には、それが青白く、高貴に見えるのである。克明な主人公の描写の中に、書き手がかろうじて、長時間観察して初めて分かった事柄が、彼の額には多数のしわがあると述べているのである。書き手が、怒りや心騒ぐときにはもっとくっきりとしわが見えるだろうと、強く推察している。

Несмотря на светлый цвет его волос, усы его и брови были черные — признак породы в человеке, так, как черная грива и черный хвост у белой лошади.

ここでは主人公の記述は Несмотря на светлый цвет его волос, усы его и брови были черные である。彼の髪は金髪なのに、口髭と眉は黒いのだ。しかし髪と髭と眉の黒さの対比から、書き手は自らの考えとして論理操作を行っている。そして一般的知識として、その黒い髭と眉は人の生まれ素性が分かるのだと言い、これはまったく、白馬の黒い鬣と黒い尾と同じだと言い切っている。

Чтоб докончить портрет, я скажу, что у него был немного вздернутый нос, зубы ослепительной белизны и карие глаза;

書き手が最後に言っておきたいとして提示したのは、補文での、主人公の記述である。そのひとつは、存在構造による、鼻が幾分反り返っている、もう一つは、歯が眩いほど白く、目は茶色、である。

о глазах я должен сказать еще несколько слов. Во-первых, они не смеялись, когда он смеялся!

さらに書き手のことばとして、目について特に言っておきたいとしている。第一に、目が笑わない、主人公が笑っているにも関わらずだ。この文 они

не смеялись, когда он смеялся! ではないずれも不完了体過去形であり、一方は否定文である。この否定文では、書き手の観察時間中にまったく目が笑うという動作はなかった。つまり目は冷徹だ。たほう観察中の事柄は、時の従属文で示されており、その観察時間中に複数回、あるいは数度笑うことがあったのである。

Вам не случалось замечать такой странности у некоторых людей?....

書き手の読み手の問いかけ：あなたたまたまこんなことはありませんか、とはいいいながら、ある種の人にこんな不思議なことがあるのだ、と書き手が断定しているのである。

Это признак—или злого нрава, или глубокой постоянной грусти.
この文はまさに書き手の、目が笑わないことの一般化である。質が悪いか、あるいは悲しみが常につきまとい、しかも深いのだと。

Из-за полуопущенных ресниц они сияли каким-то фосфорическим блеском, если можно так выразиться.

主人公の睫が半分覆い被さっているという記述。そのせいで、目の輝きも（これは彼の目がいつもきらきらしているという特徴付けである）、なにかリンのように青白い煌めきがあると書き手は言うが、やはり少しは誇張かもしれないと、限定している。

То не было отражение жара душевного или играющего воображения. то был блеск, подобный блеску гладкой стали, ослепительный, но холодный; взгляд его—непродолжительный, но пронизательный и тяжелый, оставлял по себе неприятное впечатление нескромного вопроса и мог бы казаться дерзким, если б не был столь равнодушно спокоен.

この部分で書き手の現実の観察からの主人公の記述は、目の輝きと視線が長続きしないという二点だけで、あとはすべて書き手の観察からくる価値判

断である。書き手の判断は二項性名詞文の述語部分に現れ、主語を占める部分は、現実指示される対象である。ここでは太字部分、(それは)心が熱いあるいは想像がうごめいている現れではなかった、(輝きは)滑らかな鉄の輝きに似て、眩いが、冷たい。(視線は)見透かすようで、重苦しい。(そんな視線に見られると)不躺な質問をされて不快な気分となる。そして視線が不遜と思えないのは、きわめて穏やかであるからだ。この最後の部分が、接続法を用いて、書き手が直接的に眼差しについての反事実を述べているのである。

Все эти замечания пришли мне на ум, может быть, только потому, что я знал некоторые подробности его жизни, и, может быть, на другого вид его произвел бы совершенно различное впечатление; но так как вы о нем не услышите ни от кого, кроме меня, то поневоле должны довольствоваться этим изображением.

全てこれらの指摘が頭に浮かんだのは、おそらくは、書き手自身が主人公の暮らしの詳細を事前に知っていたからだ、それから、おそらくは、他人には彼の姿が全く異なった印象を与えるだろうからだ。しかし、読者が主人公について(書き手の)私以外のだれからも耳にすることができぬから、その限りまあこの私の描写に不本意であっても満足していただかねばなりません。この部分では書き手の申し訳が動詞文で書かれている。

Скажу в заключение, что он был вообще очень недурен и имел одну из тех оригинальных физиономий, которые особенно нравятся женщинам.

結語での書き手の言は、主人公の特徴付けを、その述語で示し、つまり彼は概してとても悪いのではない、さらに風変わりな姿形をしてると断定して、その姿形は、女が好きなものだ、と一般的な価値判断している。

ここで我々が個別の範疇や構造に重点を置くより、テキストの纏まり、情報の流れと、その提示の仕方を観察してきた。ここで明瞭に見て取れるのは、

動作を記述するのは、大まかに言えば事件とも言いえる動作が、完了体過去形による示され方であり、これが一まとまりの動作として順次動作を示さねばならないことであった。このテキストレベルではロシア語動詞の体の意味という重要な研究対象は、幾分異なったアプローチを迫られることになる。体の二項対立のなかで選択を迫られる場では、個別の意味のより抽象度の高い場で体を選択していく。本来的にはいずれであっても可能であるが、一方を選ぶというときに現れるのが個別の意味である。ここに有標の意味が完了体の具体的動作性であり、それが次の情報を促すことになる、つまりは話者側の視点の移動と関連してくる。他方、不完了体は過程性という無標の中にすべてが現れる。したがって不完了体は具体的にも（この場合は体の競合として扱われる）、抽象的にも用いる（この場合は過程は具体的時間上にはなく、様々な意味が生じる）ことができる。

次に情報伝達上の二項性である。この二項性が語形式から文形式に至り、テキストにまで関わりがある。語形式における二項性は概念的部分が文法的部分によって、それが生じるより大きな連鎖でのそれ自身を規定することになる。これが文モデルの二項性の原形と考えることができる。文モデルで生じる述語に先行する部分は、指示対象を持つというより、話者が言語を用いるにあたってその居住思考空間の対象を取り上げることである。取り上げるについては、その対象の名を挙げられることもあれば、そうでないこともある。ここに語形式の概念部分がある特定の特徴属性を持つことがあり、対象自身がその概念部分を浮遊することもある。しかしこれは命名から来ることであり、空間の代表形として述語に先行する位置を占めて、その後に話者が選択する述語が現れる。指示対象としての述語に先行する部分は空のものであって構わない。それゆえ話者の選択する述語に先行する第一項は文による伝達の出発点であり、聴者にとっての指示対象の同定が理解の原点であり、さらに、選択制限で規定される述語内容の想定期待となる。話者にとっての第一項に対する述語は、まさに話者の内部の声であり、考えということにな

8. この二項が成立した後は、二項全体が規定されることになる。この部分は70年や80年のアカデミア文法に見る文の拡大子や、学校文法の文の二次成分に相当する。これらの成分は明らかに述語が規定する対象項とそれ以外の論理的意味で規定される項との区分が必要になる。言語の線条性の具現である発話文で不断に被限定項と限定項がさらなる連鎖の中で再び被限定項となっていくなかで、情報が伝達されるのである。ここに中立的な伝達での必然的なテーマの先行と、レーマの後続、また発話文での陳述される項の先行と、陳述する項の後続、文モデルでの述語の左の項と述語がテキストレベルで同一線上に生起しているのである。記述文法での明快な文定義における主語性たる名詞主格形と、近年しばしば言及される「述語の左の項」、あるいは「陳述される項」により規定される様々な形式によって、これらは文は主語、述語からなるという限界を超える装置となる。⁹

ここからはより広い情報の流れの中での論理操作が問題となる。ここでの二項性はやはり順列か逆接の情報経過の処理法である。また文の名詞化という圧縮された基の文が文要素内を占めるという手段が用いられることになる。ここには聴者、読み手の理解の側からは隠された陳述を探り当てる。それは話者・書き手の側の技術として伝達される情報に潜んでいるのである。このあたりにゾーロトヴァの伝達レジスターとしての文モデルを話者の要請で

8 アルチューノヴァはМ. И. Каринскийの判断について述べて、「文の構成が様々であるのは記号機能の性格による。主体は現実対象の記号の代理であり、述語は対象への指示は持っていない。述語とは、対象を意味するものであり、抽象概念の代理である、つまりその意味されるものにのみ属す。主体は世界に属し、述語は世界についての思考である。文が「奇跡」だとはまさに、文中で思考範疇と客観的現実の要素のある種の綜合がなされ、世界と人間との結びつきが造り上げられることである。」Н. Д. Арутюнова Предложение и его смысл. М. 1976, стр. 378.

9 Ю. С. Степанов Имена, Предикаты, Предложения, М. 1981参照。そこでは三種類の文(Я-предложения, локус-предложения/Оно-предложения, Он-предложения)を挙げて中性文は時空間を述べるものとして、副詞句や副詞による時間、空間表現を明確に主体と規定している。ここでゾーロトヴァの提案した主体の分類を文モデルに取り込み、述語との呼応関係の中で、文モデルにおける第一項としての「陳述される項」と第二項の「陳述する項」という考え方(Г. А. Золотва О субъекте предложения в современном русском языке // Филологические Науки, 1981, No.1, またКоммуникативные аспекты русского синтаксиса, М. 1982およびСинтаксический словарь М. 1988参照)をさらに押し進めて、現代論理学の常識だとしている。

のように用いているかという、機能的な場でのテキストの観察検討さらに必要になるし、われわれの現時点での状況では学校文法の機能的モデル実現にはほど遠い。しかし全体の中の部分を研究すると同時に部分からのなる全体へと至る見通しの中に、つまり分析と総合の中での話者と聴者の相互作用の中に見いだすべき解決法はあるはずである、と同時にそれがわれわれに課された課題である。

参 考 文 献

- Грамматика современного русского литературного языка, М. 1970
Русская грамматика Т. 2. М. 1980
Русская грамматика Т. 2. Прага, 1979
Н. Д. Арутюнова Предложения и его смысл М. 1976
А. В. Бондарко Функциональная грамматика, Л. 1984
拙訳 ボンダルコ 機能文法 (1998)
А. Б. Бондарко 《Эквивалентность при существовании》: концепция Р. О. Якобсона и современная проблематика страфинкации семантики Роман Якобсон Тексты, документы, исследования. М. 1999
В. В. Виноградов Основные вопросы синтаксиса предложения (На материале русского языка) в сб.ст. 《Исследования по русской грамматике》, 1975
Г. А. Золотова О субъекте предложения в современном русском языке // Филологические Науки М. 1981
Г. А. Золотова Коммуникативные аспекты русского синтаксиса М. 1982
Г. А. Золотова Синтаксический словарь М. 1988
Г. А. Золотова Говорящий лицо и структура текста в сб. ст. 《Язык-Система, Язык-Текст, Язык-Способность》, М. 1995
Г. А. Золотова, Н.К. Онипенко, М.Ю. Сидрова Коммуникативная грамматика русского языка М. 1998
И. С. Карцевский Повторительный курс русского языка М. -Л. 1928
拙訳 カルツェフスキイ ロシア語復習過程 (1997)
А. Р. Лурия Язык и сознание Ростов-на-Дону, 1998
И. А. Мельчук Курс общей морфологии Т. 1. М. 1997
Проблемы функциональной грамматики М. 1985
Ю. С. Степанов Имена, предикаты, предложения, М. 1981

A. A. Шахматов Синтаксис русского языка Л. 1941

R. O. Jakobson On linguistic aspects of translation, Selected Writings II,
The Hague-Paris 1971

R. O. Jakobson Shifters, Verbal Categories and the Russian Verb, Selected
Writings II, The Hague-Paris 1971

北原保雄 表現文法の方法 東京 1996

ダイアン・ブレイクモア 竹内道子・山崎英一訳 ひととは発話をどう理解するか 東
京 1992

ステイブ・ピンカー 棕田直子訳 言語生みだす本能（上・下）東京 1995

翻訳の手法 川本皓嗣・井上健一編 東京 1997